

AVT (Audio-Visual Translation) としての通訳と今後の課題

光藤 京子
(明海大学)

In today's world where multi-media communication plays an important role and there are various forms of translation, it seems less meaningful merely to compare interpretation versus translation, which is, the oral process versus the written one. It is more pertinent to distinguish interpretation as a multi-channel communication including dubbing, subtitling, etc. from the written form of translation. The former deals with fleeting texts and is somehow affected by non-verbal information involved in the original. This paper defines interpretation as an Audiovisual Translation (AVT) and discusses how much relevance non-verbal information has on the interpreters' performance and how this relatively new idea should be reflected in future interpreter training.

1. はじめに

通訳の仕事をしていると、海外からの顧客に、*Are you a translator?* と聞かれることがある。一応、*Yes* と答えるものの、本当は *I'm an interpreter*. なんだがと、心の底で思ったことのある通訳者は少なくないに違いない。「通訳」という概念に通じた顧客であれば、*interpreter* という言葉を使用するのが通常だが、*translator* といったところで、英語では決定的な間違いではない。英語の *translation* という言葉には、通訳、翻訳を含めた広義の意味と、文書の翻訳を示す狭義の意味の両方がある。一方、日本では、通訳者に「あなたは翻訳家ですか?」と聞くことはない。わが国では、「翻訳」という言葉は、ほぼ文書翻訳を指し、「通訳」とは区別されている。日本語には残念ながら、一つの言語を別の言語にトランスファーする行為を総称する言葉がない。Daniel Gile が区別しているように、*Translation* (広義) と *translation* (狭義) という具合に、

MITSUFUJI Kyoko, "Interpreting as Audio-Visual Translation (AVT) ."

Interpretation Studies, No. 2, December 2002, pages 87-98.

(c) 2002 by the Japan Association for Interpretation Studies

大文字、小文字で表すのは懸命な策かもしれないが、日本語ではそうはいかない。前者を「トランスレーション」としてカタカナ書きにでもするのがせいぜいであろう（以下、混乱を避けるために本稿では通訳・翻訳を総称してトランスレーションとする）。

また、上記のターミノロジーの問題とは別に、現在のマルチ・メディアが発達した時代には、多種のトランスレーションが多様な目的のために存在する。映画字幕もその一つであるが、厳密に字幕が翻訳かどうかの問題はあるにせよ、訳出されたものが文字形態をとるため、「翻訳」と捉えるのが一般的である。しかし、字幕翻訳者はスクリプトの文字情報のみに依存して訳出しているわけではなく、オリジナル音声、画像、音響など、マルチコミュニケーション・チャンネルを経たさまざまな非言語情報を、言語情報と合わせ、トータルなテキストとして扱っているのである。

このように、視覚・聴覚の両方を使用する視聴覚トランスレーション（＝Audiovisual Translation、以下、筆者はこれを AVT と呼ぶ）は、文書翻訳以外のほとんどの訳出行為にあてはまるのではないかと筆者は考えている。それは、いわゆる映像翻訳という業界ジャンルを越え、会議通訳も含めた広い領域を指す。

本稿では、AVT の定義と特徴を述べ、それらがどういう意味で通訳に当てはまるか、また、より良い通訳の教育を目指す意味で、どう通訳訓練に生かすべきかを考察する。

2. AVT(視聴覚トランスレーション)という概念

翻訳や通訳の伝統が長く、その必要性も高いヨーロッパでは、数多くの質の高い翻訳論、通訳論が展開されてきた。それらは、文学など表現の等価性を問うものから、通訳・翻訳の訓練や評価にいたるものまで実に幅広い。その中で最近注目されているのが、以下に述べる AVT、すなわち視聴覚トランスレーションである。AVT では、映像や音声を含む非言語要素がトランスレーションに果たす役割を重視する。さらにこのジャンルでの研究では、扱われるテキストが音声か文字かは関係なく、通訳、演劇翻訳、吹き替え翻訳、字幕翻訳など、視覚、聴覚両方のチャンネルを利用するコミュニケーションをすべて同等に扱い、マルチチャンネル・コミュニケーションゆえに発生するさまざまな問題を考え、それぞれの機能を比較する。以下に、おもにヨーロッパで展開している AVT に関する文献の一部を紹介する。

スペインの Frederic C. Varela (1997) によると、翻訳論は伝統的にその重点を言語そのものに置き、*paralinguistic*, *kinesic* または *semiotic* なサインを含む非言語情報を、それらがすでに言語そのものに含まれているかのように無視もしくは軽んじる傾向があった。Varela は視聴覚トランスレーションでの非言語情報の役割を重視し、言語情報と非言語情報の相互役割が AVT を独立したジャンルに位置づけると考え、以下のように定義した。

Audiovisual translation is just a modality of translation of special texts where two

narrations, which use two different channels of communication, the acoustic channel and visual channel, take place at the same time, forming a coherent and cohesive text, a third multidimensional unit. (視聴覚トランスレーションとは、聴覚と視覚という2つの異なったコミュニケーション・チャンネルを使用する、2つのナレーションが同時に起こる特別なテキストの翻訳形態で、一貫性と統括性のある第3の多次元ユニットを形成する)

また、同じくスペインの Patrick Zabalbeascoa (1997) は、伝統的な翻訳論の中で「言語要素と非言語要素の組み合わせという概念」は重視されなかったが、近年の著しい言語学の定義の広義化が翻訳の定義領域も広げるのではないかと述べている。つまり、言語学が理論言語学からよりプラグマティクスの領域へ、社会心理学、談話分析、テキスト言語学などの分野へ広がったように、翻訳も単なる言語構造を扱うものとしての捉え方から、言語の機能へ、最近ではコミュニケーションの一種として捉えられるようになったという解釈である。

そもそも視聴覚トランスレーションという概念が既成の翻訳論の中に登場してきたのは、1934年の Karl Buhler の分類を発展させて自分自身の3つの翻訳におけるテキストタイプを提示した Katharina Reiss (1971) が、4番目のテキストタイプとして audio-medial を分類に加えたことが最初であると Snell-Hornby (1997) が述べている。Snell-Hornby によれば、Reiss はまず audio-medial に入るテキストを “audio-medial: such texts have been written to be spoken or sung. (話されるか、歌われるために書かれたテキスト)” と定義し、さらに “. . . and hence dependent on a non-linguistic (technical) medium or on other audio-visual forms of expression for their full realization; language is only part of a broad complex of elements. (それを完璧に実現するために、非言語(技術的)媒体、もしくは、他の視聴覚表現形式に依存する。言語は様々な要素の複合体のほんの一部でしかない)” と続けている。この議論はドイツの翻訳学者の熱い議論を呼び、Bernd Spillner の提案を受けて、1984年、Reiss は audio-medial という名称を、聴覚要素を含まない漫画のような視覚要素だけのテキストまでも含む multi-medial に変更した。結果として、その分類には、歌、演劇、映画台本、オペラのテキスト、および視聴覚要素を含む漫画、広告などが含まれた。

さらに、近年ではデンマークの字幕翻訳研究者 Henrik Gottlieb (1997) が、AVT のテキストタイプを文書の翻訳のそれと完全に区別し、前者を次のように定義している。「視聴覚テキストとは、同時にいくつものコミュニケーション・チャンネルを使用し、流れる (fleeting) 媒体によって表現されるディスコース。テレビの緊急インタビューから、よくリハーサルされたドラマや特集番組などを含む」。

一方、Gottlieb は、マルチチャンネル・コミュニケーションの見地から、通訳・翻訳を含むすべてのトランスレーションを独自の方法で次の表のように分類した (表1)。

表 1 Typology of Translation (Gottlieb, 1998)

Semiotic composition	Time-defined categorization		
	Synchronous	Non-synchronous	Distemporal
Mono-and isosemiotic Speech Writing		Radio interpreting	Written translation
Mono-and diasemiiotic Speech Writing		Interpreting for the deaf	Book translation on audiotape Minutes from a meeting
Poly-and isosemiotic Writing+Image Speech+ Image Speech+Image +Music and Effects	Translation of comic books & advertisements Dubbing	Simultaneous interpreting TV voice-over TV commentary	Drama translation (stage performance)
Poly-and diasemiiotic Speech+ Image +Music and Effects +Writing	Subtitling	Simultaneous subtitling	

簡単に述べると、テキストの記号分類としては、monosemiotic（単一記号的）、polysemiiotic（複合記号的）、isosemiotic（同種記号的）、diasemiiotic（異種記号的）の4つがある。monosemiotic テキストというのは、ひとつのコミュニケーション・チャンネルだけを使用し、翻訳者が表現のすべてをコントロールするもので、例えば挿絵のない本はすべての表現が文字に限られる monosemiotic なテキストである。

polysemiiotic テキストは、視覚と聴覚というコミュニケーション・チャンネルによって制約を受ける（または助けられる）テキストを指す。映画やテレビドラマは、画像、ダイアログ、音楽と効果が組み合わさってトータルなコミュニケーション効果を作り上げている点で polysemiiotic なテキストである。

さらに、アウトプットがオリジナルと同じチャンネルを使う場合を isosemiotic と呼び、

違うチャンネルを使う場合を **diasemiotic** と呼んでいる。字幕は、**Gottlieb** の定義では **polysemiotic** で **diasemiotic** である。字幕の翻訳は、文字に加え、他のチャンネル、つまり、オリジナルスピーチ、画像、音楽、音響効果が加わる複合チャンネルを使用し、スピーチである台詞が書き言葉である字幕で表現されるからである。これに、**Gottlieb** は時間の概念をテキストの記号分類に加えた。すなわち、アウトプットの提示がオリジナルと **synchronous** (同時型) か **non-synchronous** (非同時型) か、あるいは **distemporal** (時間の制約なし) かに分けた。その分類でいくと、映画やテレビの吹き替え (**dubbing**) と字幕 (**subtitling**) はともに **synchronous** である。

上記の **Gottlieb** の分類は、あらゆる翻訳行為 文書翻訳、通訳、映像翻訳、言語内翻訳などをコミュニケーション的見地から分類し、記号論に時間の要素を加えて提示している点が従来の翻訳論には見られない独自性として評価できる。しかしながら、この分類では会議その他での同時通訳や逐次通訳の位置づけが明白でない。また、同時通訳をノンシンクロ型に入れているが、原稿のある通訳の場合、ほぼ同時と見なすべきなのではないかなど、通訳に関するいくつかの問題点が指摘されよう。

3. AVT において非言語情報が果たす役割

前項では、AVT の定義を考え、その種類とそれらがどのようなコミュニカティブ・チャンネルを経由しているかを概観した。明白なのは、AVT では人間の2つの知覚、視覚と聴覚から得られる情報をさまざまな組み合わせで複合的に取り入れ、訳出することである。その結果、AVT では過去におもな研究対象になってきた言語そのものに加え、非言語情報が訳出に関与しているのではないかと考えられる。

例えば、画像を使用する映画の字幕翻訳やテレビの放送通訳の場合、画像というのが非言語情報として果たす役割は大変大きい。それは、視聴する翻訳者、通訳者の理解を補助するばかりでなく、情報の受け手である視聴者の理解をも補助する役目を持っている。映画字幕の場合、翻訳者はオリジナルの SCRIPT だけで翻訳を行うことはない。必ず、初回試写、中間試写、最終試写に参加し、言語情報と非言語情報の整合性を確かめ、理解した内容が正しいかの確認を行う。例えば、映画の一場で女性が男性にコーヒーを欲しいかどうか尋ねている。男性の答えは SCRIPT では **Yes** と書かれているが、どういう音調や俳優の表情でこの言葉が語られているかはわからない。親しい関係なのにあえて **Yes** と言っていることから、訳者は何か含みがあるなと感づくが、思い切り嬉しそうに言っている場合も考えられるし、別のことで怒っているのかという言い方になっているとも考えられる。画面を見ると、その言い方はあまり積極的ではなく、顔は何か他のことに捕らわれているように見える。この時、翻訳者は「うん、頂戴！」とは訳さず、「ああ…」と訳すほうが適切と言える。

一方、字幕とは違い、通訳は何と言っても音声を中心である。画像がない会議の同時通訳者がブースの中で集中するのは、おもにスピーカーの発する **paralanguage** も

含む言語そのものである。しかし、ベテランの通訳者の場合、音声に集中すると同時に、ブースの外に観察できるスピーカーの非言語情報にも必ず注意を払っている。Fernando Poyatos (1997)は、paralanguage以外のスピーカーの kinesics にも注目した。それらがスピーカーとふつう隣合わせで通訳する逐次通訳だけでなく、ブースに入っている同時通訳にも少なからず細かい影響を与え、同時通訳および逐次通訳に関して、verbal language とそれに伴う paralanguage, kinesics は重要な “triple audiovisual reality” だと述べている。音声などの paralanguage 要素のほかに、指を鳴らすなどの audible kinesics、silence と stillness, gesture, manners, postures, proxemics を含む kinesics、涙を流す、目を輝かせるなどの chemical reactions、頬を赤らめるなどの dermal reaction などの非言語情報が通訳の理解を補足し、そのパフォーマンスを左右する重要な要素である言う。また、非言語情報が言語情報に影響を与えるその機能としては、追加的、支持的、反復的、強調的、反強調的、矛盾的、経済性、言語の欠如の埋め合わせ、などを挙げている。例えば、言語では十分肯定的な答えを述べているスピーカーの声や顔を観察すると、明らかにそれを弱めるようなトーンと表情があって言動と心が一致していないことがわかる。逆に、日本人は笑いながら肯定的な言語行動を取る場合でも否定の場合がある、というケースなどである。それらをどこまで訳出するかは、状況を踏まえて通訳者が的確な判断をしなければならない。

国連通訳である Sergio Viaggio (1997)もまた、kinesics は不完全なスピーチの言語情報を補ったり、時にはまったく代替する (substitute) ばかりでなく、「会議に参加している人々のボディランゲージや他の非言語行動は、言葉の背後にいったいスピーカーが何を本当に言わんとしているかを通訳に教えてくれる」と述べて、その重要性を強調する。さらに、言語情報に対して非言語情報はアナログ的であり、通訳者は言語を処理する行為を邪魔されることなく、重要な非言語情報を無意識に使っているとも述べている。Viaggio によれば、非言語情報は、healthy hiker にとっての walking stick と同じで、非言語情報の知覚、分析、使用は、通訳の認知作業に負担を与えるものではなく、翻訳プロセスの補足、援助、バランス化を行うことにより、むしろ、それを軽減するのだとも述べている。

上記の2人の主張は、ベテラン通訳なら当然無意識に取り入れ、実行している作業だが、通訳は単に音声による言語変換を行うのみではなく、非言語情報を含む人間の総合的な行為をトータルに訳出するという点を初心者の通訳はまず理解することが大切であろう。通訳訓練にも、コミュニケーション的見地に基づいた教育を、今後ますます取り入れることが重要であると考えられる。

4. AVTとしての通訳

今まで述べてきたことを Gottlieb の定義と合わせてまとめると、AVT の定義は次の

ようになる。

- (1) 同時にいくつかのコミュニカティブ・チャンネルを利用する。
- (2) 流れる (fleeting) テキストを扱う。
- (3) 言語、非言語情報両方が訳出に関与する。

さて、筆者は以下に3種類の通訳（会議の同時通訳、逐次通訳、放送通訳）を取り上げ、画像やスピーカーが通訳や視聴者である受け手に与える言語、非言語情報にはどのようなものがあるのか、簡単に表に示してみた（表2）。また、比較のために、アウトプットが文字である点で通訳とは異なるが、もっとも複合チャンネルを使用する字幕翻訳も付け加えた。ここでは、通訳・翻訳者などの訳者のみでなく、受容者（視聴者）の立場からも、どのような情報が受け手に伝わるか考えている。なお、Gottliebと同じように、時間的要素をオリジナルとアウトプットの提示時期に関して付け加えてみた。

表2 4種類のAVTで訳者、受容者が関わる情報の種類

訳出方法	訳者が扱う情報	受容者が受け取る情報	時間的制約
同時通訳 (会議)	Sの音声・非言語 情報±文字	T音声+Sの音声・非言 語情報	ほぼ同時的
逐次通訳	Sの音声・非言語 情報±文字	Sの音声・非言語情報 Tの音声・非言語情報	非同時的だが制約 有り
放送通訳	Sの音声・非言語情報 +その他の画像±文字	T音声+Sの非言語情報 +その他の画像	ほぼ同時的
字幕	Sの音声・非言語情報 +その他の画像+文字 ±音楽・音響効果	Sの音声・非言語情報+ その他の画像+文字±音 楽・音響効果	同時的だが、即時性 はない

(注1) S=スピーカー、T=通訳

(注2) 逐次通訳と放送通訳の文字情報は、通訳自身が作成するという点で他と異なっている。

会議の同時通訳に関しては、おもにイヤホンから聞こえてくる、paralanguageを含むS音声に集中するが、原稿のある場合は同時に文字にも集中する。また、ブースの位置により、通訳はスピーカーの非言語情報を受け取ることも可能である。一方、受容側では、T音声のほか、目の前にいるスピーカーのS音声（主に言語情報ではなく、スピーカーのparalanguageの部分）、および表情やしぐさなどの非言語情報が同時に視聴されるため、受容者は複合的でトータルな情報を受容することになる。オリ

ジナルと通訳の提示の時間差は、多少のずれがあるとはいえ、ほぼ同時的と言ってよいだろう。

逐次通訳は、スピーカーが話し終わった後に通訳するので、頭の中に残っているスピーカーの言語・非言語情報と、メモを取る場合は手元に残したメモ、つまりすでに文字へ変換された情報とを総合して訳出することになる。通訳も受容者もスピーカーを比較の見易い位置で観察できるため、スピーカーの非言語情報が果たす割合はもっとも多くなる。受容者は、スピーカーの声のトーン、表情やジェスチャーからスピーカーの心理状態を観察した上で通訳の解説を聞くことになるので、情報理解は深くなるだろう。また、受容者が通訳の非言語情報も観察できる点で他と異なっている。時間的には、上の2つと比べ、同時進行という制約はないが、すでにスピーカーのトークを聞いた後に通訳するので要領よく手短かにまとめる必要があり、通訳は独特の時間的制約を受けることになる。受容者にとっては、通訳が早すぎるのも迷惑だが、ゆっくり丁寧過ぎるのも冗長な印象を受けるため、そのバランスが難しい。

放送通訳では、原稿を事前に準備できる時差通訳と生番組を担当する生同時通訳がある。いずれにせよ、画像との整合性という、会議の同時通訳にはない制約があると言ってよい。逆にこの制約は、通訳にとっても受容者にとっても状況の理解を深めるという意味で補足的である。それは、字幕などの画像を含む翻訳行為には共通する特徴である。また、オリジナル音声に通訳がかぶさるボイス・オーバーの場合は、S 音声および音響なども非言語情報として受容者は受け取ることになる。時間的な制約は会議の同時通訳とほぼ同じと見てよいだろう。

最後に、ここでは唯一文字情報が提示される字幕だが、ドキュメンタリーやニュースなどの字幕に比べて、映画・ドラマなどの字幕では翻訳者、受容者が受け取る非言語情報の果たす役割が大きい。映画・ドラマなどの字幕ではバックグラウンドに流れる音楽や音響効果、俳優の表情や声など、いずれもストーリー理解に欠かせない要素だからである。いずれにせよ、コミュニケーション・チャネルの複合度がもっとも高い。しかし訳者はそれだけ多種のチャネルから情報を得るわけで、文字だけに頼るよりは訳出が楽になる。また、情報の複合度が高いのは受容者にとっても同じだが、これは理解度を高めると同時に、画像と文字を同時に見るという受容者の物理的負担が大きくなる。そのために、訳者は唯一調整可能な文字情報をつとめて簡潔に、最小限に留める必要に迫られる。時間的には、提示される空間に食い違いがある場合もあるが、同時的とみてよいだろう。ただし、字幕は事前に準備されているので、通訳に求められる即時性はない。

以上、言語・非言語情報と訳者、受容者との関係を簡単に述べた（ただし、対象になるテキストの違いにより、上の表のような単純な分類が当てはまらないケースもあることは付け加えておく）。さらに、これらの制約は場合によっては補足的に働き、場合によっては受容者の利益を損なうこともあることに注目したい。トランスレーショ

ンの究極的な使命が受容者の利益という観点から考えると、訳者は言語だけでなく、非言語情報をどう捉え、訳出にあたっていかに処理するかが課題となる。それらを次項に述べたい。

5. 情報伝達の調整役としてのトランスレーター

言語がおもに焦点となる文書翻訳と違い、通訳やその他の AVT では、言語情報と非言語情報が総合的に視聴されるため、それらの効果や制約を踏まえた上での訳出上の情報伝達調整が必要である。この点について、例えば Gottlieb (1994) は、字幕の中の reduction (省き) や dialog condensation (台詞の短縮化) は、話者の喋る速度、画面の切り替えに伴う字幕の必要悪であると言いながらも、同時に次のような理由があることに言及している。

- 1) Intersemiotic Redundancy (記号間重複) の回避。すなわち、視聴者は字幕だけでなく、他のチャンネル、特に画面と俳優の台詞の音調的特徴からも情報を受けている。
- 2) Intrasemiotic Redundancy (記号内重複) の回避。即時のスピーチはもちろん、あらかじめ考えられたスピーチや台本のあるナレーションでさえ多くの redundancy (重複) を含んでいるので、字幕における情報の縮小はかえってスピーチの効果を強化する。

つまり、画像にいる人物が興奮しているからといって、それを極度に反映させた訳を載せることは逆に情報過多になり、受容者の利益にならない。また、話し言葉における redundancy (重複) をそのまま文字情報に載せることも受容者のスムーズな視聴を妨げるということである。字幕は、あくまでも主役ではなく脇役と考えられているため、脇役を控えめにすることで主役を引き立たせる効果も考えているということだろう。

字幕では、特に映画の字幕では字数の制限が大きいため、多くの reduction (省き)、dialogue condensation (台詞の短縮化) が行われている。その際、意味情報の重要度を優先することは言うまでもないが、いわゆる画像からの俳優の発する音声、動作、ストーリーの流れ、バックグラウンド音楽など、受容者が知覚できる多くの非言語情報を頼りに reduction や condensation を行う例が多い。例えば、オリジナル言語をほとんど理解しない視聴者でも認識している言語表現 (挨拶や簡単な表現)、続けて 2 度繰り返される台詞、画像ですでに把握できる行為 (呼びかけの場合の相手の名や Yes/No のジェスチャーなど)、俳優の感情などを訳にそのまま反映させると情報の重複になり、視聴者のスムーズな理解を妨げることもある。画面の中の子どもが子ども言葉で話しているのに、さらにそれを子ども言葉で字幕にし過ぎるのを避けたほうが良いという字幕翻訳者 (戸田 1997) の主張には、文字の視覚的、審美的要素に加えて、情報の重

複を避けるという理由を付け加えることも可能である。

通訳の場合、それが人間的行為であることに付け加えて、時間的制約やスピーカーの言語情報が *spontaneous* で *fleeting* であることから、ベテランの通訳の訳出にもかなりの重複が観察されることが予測される。これは小松 (2001b) の論文でも報告されている。特に、統語的に異質な日英の通訳では、それらを完全に排除することは不可能だろうが、受容者にとっては、簡潔かつ正確で、無駄のない言語情報を受け取ることがベストなのは言うまでもない。

一方、言語に伴う非言語情報の扱いについては、通訳の工夫で調整可能であるというのが筆者の考えである。例えば、オリジナルのスピーカーが興奮しているからと言って、その感情をストレートに訳に反映させることは、受容者にとって情報の重複になりうる。ある程度、その雰囲気を再現する必要はあるだろうが、必ずしも一緒の興奮状態で通訳することが受容者の利益になるとは限らない。受容者は、すでにスピーカーの感情を言語外の情報で理解しているわけだから、通訳では内容のみが受容者にとって重要になる。一例として、テレビである通訳が、俳優のインタビューを俳優と同じテンションで身振り手振りを加えて逐次通訳したことがあった。それに対して筆者は、冷静で機械的な通訳よりも人間的で温かい印象を受けたが、人によっては情報の重複で耳障りに感じたと同時に、個人の感情移入がありすぎるという意見もあった。受容者の立場から見ると、スピーカーの話の中身以外はすでに視聴しているわけだから、後は何を言っているのか、通訳が手短かに要領よく説明してくれるだけで十分だったのである。このあたりは、通訳者が「心ある人間的な通訳」と「的確で無駄のない通訳」とのバランス化に苦慮する点だろう。

さらに、最近、世界的なスポーツ・イベントの中継や多くの外国人の来日などにより、テレビを通じて通訳が一般の人々の目に触れる機会が増えてきた。放送通訳では、声の張りなど、アナウンサーと同質のものが求められるということだが、通訳が一般化するにつれ通訳への要求もますます高くなることが予想される。情報伝達の調整役としての役割に加え、スピーチ・コミュニケーションの分野である、発声、間の取り方、論理的で説得力のある話法、立ち振る舞いなど、トータルなパフォーマンスとしての通訳の側面も、今後の通訳訓練に組み入れられるべきであろう。

6. 今後の課題

以上、通訳をマルチチャネル・コミュニケーションとして捉え、AVT としての特徴と制約について述べてきたが、今後の通訳研究や訓練の中で、それらを十分認識した上で適切な訓練を行うことは重要であると確信している。Viaggio (1997) は、将来の通訳候補生に “Listen with your eyes and speak with your bodies” と説くことを勧める。paralanguage や kinesics に無頓着な従来の通訳に対する警告である。通訳を含むマルチチャネル・コミュニケーションとしての AVT は、単に言語のみを扱ってい

るのではなく、人間のトータルなコミュニケーションを扱っているという認識が、これからの通訳には必要だろう。また、小松(2001a)は、通訳とはある意味で「芸」("art"あるいは"performance")であると述べ、実証的な研究の重要性を十分理解しつつも、今後 prosody などを含めた全体論的、直感的アプローチも必要だと説いている。そういう意味で、これからの通訳研究および通訳訓練には、スピーチ・コミュニケーション、異文化コミュニケーション、心理学、パフォーマンス学などが重要になってくると考える。通訳・翻訳は、究極的には受容者のためであることを考えれば、訳出される内容の正確さや的確さの重要性もさることながら、通訳のパフォーマンスがあらゆる角度から分析・研究され、良い通訳が増えることを希望して、本稿を締めくくりたい。

著者紹介：光藤京子 (MITSUFUJI Kyoko) 元会議通訳者。現在は明海大学外国語学部非常勤講師として、英語および字幕翻訳を教える。関心のある分野は、視聴覚翻訳論、映画字幕翻訳。E-mail: <KeriMitsu@aol.com>

[参考文献]

- Gile, Daniel. (1995). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Gottlieb, Henrik. (1994). "Subtitling: People translating people." In C. Dollerup and A. Lindegaard(ed.). *Teaching Translation and Interpreting*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- . (1997). "Quality Revisited: The Rendering of English Idioms in Danish Television Subtitles vs. Printed Translations." In Anna Trosborg(ed.) *Text Typology and Translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- . (1998). "Subtitling." In Mona Baker(ed.). *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. Routledge.
- Poyatos, Fernando. (1997). "The reality of multichannel verbal-nonverbal communication in simultaneous and consecutive interpretation." In Fernando Poyatos (ed.) *Nonverbal Communication and Translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Snell-Hornby, Mary. (1997). "Written to be Spoken: The Audio-Medial Text in Translation." In Anna Trosborg (ed.) *Text Typology and Translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Varela, Frederic C. (1997). "Translating non-verbal information in dubbing." In Fernando

- Poyatos(ed.) *Nonverbal Communication and Translation*. pp. 315-326. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- . (1998). "Textual Constraints and the Translator's Creativity in Dubbing." In Ann Beylard-Ozeroff, Jana Kralova and Barbara Moser-Mercer(ed.) *Translators' Strategies and Creativity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Viaggio Sergio. (1997). "Kinesics and the simultaneous interpreter: The advantages of listening with one's eyes and speaking with one's body." In Fernando Poyatos(ed.) *Nonverbal Communication and Translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Zabalbeascoa, Patrick. (1997). "Dubbing and the nonverbal dimension of translation." In Fernando Poyatos(ed.) *Nonverbal Communication* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 小松達也 (2001a). 「通訳研究の現状と今後の課題」『明海大学大学院応用言語学研究科紀要』応用言語学研究 No.3
- . (2001b). 「日英逐次通訳の分析－試論」『通訳研究』第1号 日本通訳学会
- 戸田奈津子 (1997). 『字幕の中に人生』 白水ブックス
- BS 放送通訳グループ [篠田顕子・水野的・石黒弓美子・新崎隆子] (1998). 『放送通訳の世界』アルク
- 光藤京子 (2001). 「映画字幕のコミュニケーション－機能的等価性の視点より」青山学院大学大学院国際政治経済学研究科 国際コミュニケーション修士論文